

令和5年度 第75回 卒業式 式辞

本日ここに、PTA会長 福島宏一様、教育後援会会長 長谷川憲治様、駒草同窓会会長 片桐道子様をはじめ、PTAや同窓会そして富澤学園関係の皆様をご来賓に迎え、第75回東北文教大学山形城北高等学校卒業証書授与式をこのように盛大に挙げていきますこと、卒業生とともに職員一同、厚く御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました351名の皆さん、ご卒業おめでとう。

そして、保護者の皆様、本日はお子様の立派に成長された晴れ姿に、感慨ひとしおのことと拝察いたします。中学3年生の時に広がり始めた新型コロナウイルス感染症は高校生になっても収まらず、随分と不自由を強いられた日々が続きました。幸いにしてこの一年はほぼ日常を取り戻しましたが、高校生という多感な時期に、子どもの悩みや喜びに共感しながら成長を支えていただき、本校教育に対しましても温かいご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

振り返れば、3年前の4月8日、新しい生活様式が求められる中、マスクを付け、国歌・校歌の演奏も、お祝いの言葉もなく、入学式は2回に分散した形で行われました。この年、霞城公園の桜は観測史上最も早い開花で、皆さんの門出を祝福するように満開でした。私は式辞の中で、日本全国のソメイヨシノは接ぎ木というクローン繁殖で増やしたもので、同じ遺伝子であるために一斉に花が咲き、一斉に散る特性を持つ。一方、人間は誰一人として同じ遺伝子を持つ人はおらず、興味や関心そして能力もそれぞれであり、高校3年間は自分らしさとは何なのか、自分の生きがいは何なのかなど、自我の確立に向けてもがき苦しみ、仲間と切磋琢磨するよう話をしました。今振り返ってみて、本校での高校生活はいかがだったでしょうか？ 楽しかったですか？ 友達とはたくさん語り合いましたか？ やり残したことはないですか？

私がこうやって対面で話をする機会はクラスマッチや城北祭に限られ、ほとんどはライブ配信によるものでした。ちょうど去年のバレンタインデーはオンラインの全校集会の日で、「好きなものは何？」って聞かれたら、それはあなたを好きだったというメッセージだからね、などという話もしました。いろんな話をしました。しかし、一つだけ、話さなければ話さなければと思いつつ、先延ばしにしていたことがあります。

2年前の2月24日、ロシアはウクライナへ軍事侵攻を開始し、ロシア・ウクライナ戦争が始まりました。両国併せて50万人を超える死者が出ているという報告があります。また、昨年10月7日に始まったイスラエル・ハマスの戦争は、兵士に限らず、女性や子どもなどたくさんの一般市民も巻き込んでいます。皆さんが高校生の時に始まったこの2つの戦争は、後に教科書に載るほどの大きな出来事ですが、まだ終結は見通せません。私の最後の話は、戦争についてです。

1月中旬、『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』という映画を観ました。この映画は、昨年12月に公開され、若い人たちの間で感動の声が多く、今も大ヒットしている作品です。親にも学校にも不満を抱えている高校生の百合は、ある日、進路をめぐって母親と大喧嘩し、近所の防空壕跡で一夜を過ごすところから物語は始まります。目を覚ますと、そこは1945年夏、戦時中の日本でした。制服を着たままタイムスリップした百合は、彰という成年に出会います。真つぐな百合は幾度となくトラブルを起こしますが、そのたびに彰に助けられ、しだいにその誠実さや優しさに惹かれていきます。ところが、彼は出撃を待つ特攻隊員だったのです。

戦時中は全てのことを「仕方がない」と受け入れなければならなかった時代ですが、令和の時代に生きる百合はその不条理さに納得がいきません。戦争という抗えない運命を受け入れようとする彰と、日本が戦争に負けることを知っている百合、果たして百合は彰の出撃を止めることができたかどうか … ここでその結末を明かすことは控えておきます。

私の父は大正生まれで、19歳の時に召集され戦地に赴き、満州、今でいう中国の東北部で終戦を迎えました。今更ながら残念に思うのは、父から戦争の話聞くことはあまりありませんでした。16歳で終戦を迎えた母からもほとんど聞いた覚えはありません。母は兄を戦争で亡くしているため、話したくなかったのかもしれませんが、母の実家には、軍服

姿の若くて凛とした遺影が飾られていました。当時カメラは一般家庭に普及しておらず、出征が決まると皆、帰らぬことを想定し、写真館で遺影を撮影してから戦地に赴いたわけです。

私の伯父が戦場で命を落とし、一方父が無事に生還できたのはどうしてなのか、その答えはこの映画を見てわかったような気がします。それはただ運が良かっただけなのです。戦時中、死というものには日常のすぐ隣にあり、爆撃があれば生きるか死ぬかはまさに偶然の出来事だったといえます。この映画はそういった悲惨な情景とともに、食べる物にも着る物にも不自由していた日常が綴られています。そして、若者は未来に夢を持つことができないばかりか、自分の意思とは無関係に死ぬことを強要されていた事実があったことに涙が溢れます。

私が今ここに立っているのは、父が生き延び、そして母と出会ったからです。当たり前のことですが、戦後78年が経っているわけですから、日本では78歳より下の人は皆、戦争を生き延びた人から生まれたということになります。その一方で、戦争で命を落とした人たちはどれほど無念だったのでしょうか。

鹿児島県に、第二次世界大戦末期において、特攻という人類史上類を見ない作戦で、飛行機もろとも敵艦に体当たりした隊員の遺品を展示している施設があり、そこには、ある軍人が婚約者に宛てた自筆の遺書が展示されています。こんな内容です。

いたずらに私と過ごした過去にこだわらず、新しい生活を始めてください。

一瞬一瞬を大切にしながら、現実の中を生きるのです。

私は明るく、笑いながら、散って往きます。

この方は、恋人から贈られた白いマフラーを首に巻き、出撃したそうです。どれくらいの青年たちが愛する人のことを胸に秘め、大空に飛び立っていったのでしょうか。

映画『あの花・・・』のエンディングで流れる歌は、福山雅治さんの『想望(そうぼう)』という曲で、本編を観てから作り上げたものだそうです。その歌は、

うちに帰ろう ごらん夕焼け 綺麗と思える 小さな世界で

泣いたり 笑ったり 食べたり 眠ったり

僕らは 今 生きている

という歌詞で終わります。福山さんは、いま日々を生きているという幸せを歌にしたのだらうと思います。ウクライナにもパレスチナにも、そして大地震に見舞われた能登半島にも、まだ平和な日常はありません。

卒業生の皆さん、毎日のお弁当や雪の日の送迎など、君たちのあらゆる日常に家族の愛情が込められていたことを忘れてください。勤務時間が過ぎても続く熱心な指導や休日の部活動、遠征など、先生方の情熱も決して忘れないでください。そして、これからは新しい出会いの中で、誰かを好きになったり、手を差し伸べたりしながら、他者を敬い、人を愛し、自らを信じて、真っすぐに生きるのです。未来があることの幸せに鈍感になってはいけません。生きるということは、ただそれだけで価値があるということも、生涯忘れずにいてください。

戦時中、平和な日常を知らず、我慢ばかりを強いられながら少女時代を過ごした私の母は、生涯、自分で決めるということが不得手でした。そして、父が亡くなったとき、色や形など何種類かある中から父の亡骸を入れる棺を、いくら促しても母は自分で選ぶことができませんでした。

皆さんは自らの意志で決めることのできる時代を生きています。今という日常を大切に、自己決定できるという幸せをかみ締めながら、これからの尊い未来を精一杯生きてくれることを願い、式辞とします。

令和6年3月1日

東北文教大学山形城北高等学校 校長 大沼 敏美